聖　書：コリント人への手紙第一８：1〜6
説教題：知識と愛
日　時：2022 年 7 月 10 日（朝拝）

今日からまた新しいテーマに入ります。これまでコリント教会の分派の問題、また不道徳の問題、そして前回まで 7 章全体に渡って結婚に関する問題について語られました。特に結婚に関する問題は、そのメッセージを汲み取るのがなかなか困難な箇所でもありました。しかしそれが終わったかと思うと、またすぐ次の大きな山がここに現れます。このコリント書第一はなかなか読み、理解するのにエネルギーを要する書簡であると思います。

さて今度のテーマは「偶像に献げた肉について」です。1 節の「次に、偶像に献げた肉についてですが」という始まり方は、7 章 1 節と同様、コリント教会から届いた手紙に書かれていたことをパウロが取り上げたことを示す書き方です。おそらくこのことに関するパウロへの質問があったのでしょう。それに対する回答が、この後 10 章までのスペースを割いて記されます。果たしてこれはどういう問題だったのでしょうか。

当時の異邦人世界における社会生活・市民生活は異教の神々との関わりなしには考えられませんでした。様々な会合は異教の神殿や偶像の神々が祭られた場所で行われ、そこでささげられたいけにえが振る舞われる形で地域の行事や祝宴が開かれました。そのようにして供される食べ物に対してクリスチャンはどういう態度を取るべきかという問題です。この手紙を見て行くと主に 3 つの状況が考えられていたことが分かります。一つは異教の宮や偶像礼拝が行われる場所での会合や食事会に参加することはどうなのか。そこで振る舞われるものを食べて良いのか悪いのか。二つ目は当時、多くの市場に出回って店頭で売られた肉は、偶像にささげた後、市場に卸されたものが多かったようです。そういう偶像にささげたかもしれない肉を買って家で食べることはどうなのか。良いのか悪いのか。そして三つ目は信者ではない友人の家に招待されて、そこで偶像にささげた肉が出された場合、どうすべきか。コリント教会の中のある人たちは、これらいずれの場合も、そこに出かけてそれらを食べても問題ないとしました。この後見ますように、彼らは偶像は実際には存在しないものであるという知識を持っていたからです。存在しないものは肉に対して何の影響も与えない。だか

ら世の人々との付き合いのために、そのような場所に出かけても問題もないし、またそこで出されるものを食べても何の問題もないと考えました。一方、ある人々はそれは良くないと考えました。彼らは異教世界の中で主を信じ、偶像礼拝と決別し、そこから抜け出た人々でした。なのにまた異教の神殿に行って礼拝行為に関わるようなことをするのは前の生活に逆戻りすることではないのか。またそんな場所で偶像にささげた肉を食べることは、汚れが自分の中に入ることを意味するのではないかと考えた。こんな意見の相違がある中で、食べても良いとする人々は食べるべきでないと考えていた人たちを見下していたようです。偶像は実際にはないものであるという知識を彼らはきちんと持っていないから、あのように迷信的に恐れている。彼らも我々と同じ知識を持つべきである。そしてそのことをはっきりさせるため、その人々はあえてそういう場に出て行って、人々が見ている前で、このように肉を食べることは問題ないと示す行為をしていたようです。しかし一方の人々はそれを見て心を痛めます。こうして教会の中にはさらなる分裂が生じていました。そして中には構わず食べるべきだと主張する人々の強い声に押されて、様々な場面で、自らの意志あるいは信念に反して強制的にそれらの肉を食べるように仕向けられる人も出て来た。これはその人を滅ぼすことである！とパウロは後の箇所で言います。こういう問題があったのです。そのことについてパウロは語って行くのです。

まず 1 節に「私たちはみな知識を持っている」ということは分かっていますとあります。括弧の中の言葉はコリント教会からの手紙にあった言葉と考えられますので、コリント人たち自身が自分たちは知識を持っている！と主張していたことになります。彼らはパウロにも自分たちの意見に賛同してもらい、いわばパウロのお墨付きをもらって、反対する人たちにも同じ認識を持ってもらおう、そのようにして（良く言えば）彼らを助けてあげようと思ったのでしょう。

パウロはあなたがたが知識を持っているということは分かっていると言います。すでに 1 章 5 節でパウロはコリント人たちに知識の賜物が与えられていることを認め、神に感謝していました。パウロはそのことは分かっていると言います。そしてそれ以上ここではそのことに触れず、むしろ知識を誇る人たちへの警告の言葉を語ります。「しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」と。パウロはここで知識そのものを否定し、愛だけを特別に持ち上げようとしているわけではありません。ピリピ人への手紙 1 章 9 節に「あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ

豊かになりますように」という祈りが記されていますように、愛は知識によって強められるべきものです。知識に基づかない愛は危険です。それは独りよがりの愛、感情任せの愛、逆に周りの人々に害を及ぼす愛となりかねません。ですからもちろん知識は必要であり、大切です。しかしここでは愛と結び付かない知識のことが言われているわけです。そういうただの知識は人を高ぶらせ、高慢にする。私は知っているが、あの人は知らない。こうして他者を見下すことにつながります。コリント教会で起こっていたことはまさにそのことでした。その一方、愛こそが人を育てると言われます。この「育てる」という言葉は第三版までは「人の徳を建てる」と訳されていましたが、その基本的意味は「家を建てる」というものです。相手の人を建て上げること、その成長に仕えることです。パウロは愛こそがこの働きをすると言いました。

2 節は知識を誇る人たちの問題点をさらに述べたものです。そこに「自分は何かを知っていると思う人がいたら」とあります。「思う」というのは、自分がそう思っているだけで、本当に知識を持っているのではないことが暗示されています。「その人は、知るべきほどのことをまだ知らない」と言われます。本当に物事を良く知っている人は、自分は知らないことがまだまだ沢山あるとわきまえている人であると良く言われます。神に関係する知識ならなおさらそうでしょう。神の偉大さを知れば知るほど、人は謙遜にさせられるはずです。ですから自分はもう色々分かって来たと自己満足し、自分を誇っている人は、知るべきほどのことをまだ知らない人ということになってしまいます。

3 節はその知るべきことを知る道について語っているものと考えられます。それは神を愛するということです。イエス様は十戒をまとめて、人間にとって重要な第一の戒めは「心を尽くし、命を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」であると言われました。これと切り離された知識は真の知識とは言えません。真の知識は神を愛する歩みとセットです。しかしこの節後半は次のように続きます。「だれかが神を愛するなら、その人は神に知られています」と。これは何を言っているのでしょう。これは私たちの神への愛は、それに先立つ神の愛、神の知識に支えられているということです。ガラテヤ人への手紙 4 章 9 節にも似たようなパウロの言葉があります。彼はそこで「今では神を知っているのに」と述べた後、「いや、むしろ神に知られているのに」と言い直しています。つまり私たちが神を知ること以上に重要な事実は、神がまず私たちを先に知っていてくださることであるということです。この「知る」

という言葉は、神の選びや神の愛を意味しています。ですから私たちが神を愛するなら、それは神がまず私たちを愛し、私たちを知っていてくださるからであるということです。

こうして神を愛して生きている人は、私たちの愛に先立つ神の壮大な愛を知り、その愛に圧倒され、喜んでその愛に生かされている人です。そういう人は当然周りの人々の関係においても、その神の愛を映し出す生き方をするはずでしょう。神は愛によって私たちを育ててくださっています。その神を知り、神に感謝している者として、私たちも周りの人々に「愛」を基本的態度として関わって行くべきである。そのことをパウロは示しているのでしょう。

こうして大切な基本原則について触れた後、パウロは 4 節で本題に戻ります。4 節の括弧の中の言葉は、これまで同様、手紙に記されていたコリント人たちの主張を指すと考えられます。「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」。パウロもそのことに同意します。そして彼は 5〜6 節の言葉を続けます。「というのは、多くの神々や多くの主があるとされているように、たとえ、神々と呼ばれるものが天にも地にもあったとしても、私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至るからです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在するからです。」　ここを読むと、パウロはコリント人の主張にただ同意しているだけのようにも見えます。その場合、パウロは偶像は実際には存在しないのだから、偶像にささげた肉を食べることは問題ないとするコリント人の立場に賛同しているかのように見えます。しかしこの後を見て行くと分かるのですが、パウロは決してこのいわゆる知識派のコリント人たちの立場に立つことはしていません。ですから一見彼らに同意しているだけのようなこの言葉の中にも、パウロがこの後敷衍する大切なメッセージが隠されていると言われます。

2 点申し上げます。その一つ目は 5 節と関係し、パウロはここでコリント人たちが多くの異教に囲まれている中、ただお一人の神にこそ忠誠を尽くして生きるべきであるとの原点を強調しているというものです。5 節後半の「たとえ、神々と呼ばれるものが天にも地にもあったとしても」という表現は、「たとえ、〜としても」という言い方や「神々と呼ばれるもの」という言い方から、そのような偶像の神は実在しないと

するコリント人たちの立場に同意するものと言えます。しかし 5 節前半の「多くの神々や多くの主があるとされている」という現実があることまでは否定できません。「偶像の神々は実際には存在しない」の一言をもって、すべてを片付けられるわけではありません。その実体はないとしても、現にコリントの町では、また世界のあらゆる場所では「多くの神々や多くの主があるとされて」います。これはどう説明されるのでしょう。それについてはパウロは後の 10 章 20 節で、偶像の神々は実際にはないものではあるが、それを人々に拝ませようとするその背後にある力はあると言っています。すなわちそれは悪霊であると。ですから偶像の宮で祝宴にあずかることは無害ではない。それは悪霊と交わることだからやめなさいと言います。そこまでのことはパウロはまだここでは言っていませんが、多くの神々や多くの主があるとされている状況の中で、まさにただお一人の神にのみ忠誠を尽くす歩みをするように！コリントの町を取り囲む悪の力がある中で、まことの主にこそ忠誠を尽くす生き方をするように！という原点を強調しているということです。

もう 1 点は 6 節と関係します。パウロは「唯一の神以外には神は存在しない」というコリント人の主張に同意しつつ、6 節で唯一の神である父なる神と、唯一の主であるイエス・キリストとを並置します。父なる神については、「この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至る」と言われて、この神こそすべての源であり、またゴールであると言われます。私たちはこの神にすべてを負うていますし、また私たちの人生はこの神に向けられたものです。すなわち神に向かう神中心の生き方こそ、私たちに与えられた真に意味ある人生であるということです。そして続いて「唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで」と言われ、「この主によって」という表現が 2 回繰り返されます。この「よって」という言葉は、英語の through に相当する言葉で、この方を「通して」という意味です。つまりイエス・キリストは先に語られた神のみわざの仲保者であるということです。キリストに関する二つの表現の内、一つ目の「この主によってすべてのものは存在し」という部分は、創造のみわざにおけるキリストの仲保者としての働きを指し、二つ目の「この主によって私たちも存在する」という方は、「私たち」が特にクリスチャンを指すと考えられますので、贖いのみわざにおけるキリストの仲保者としての働きを指すと考えられます。つまり私たちが今このように存在し、クリスチャンとして救いの道を歩んでいるのは、イエス・キリストのおかげであるということです。そしてここに意味されていることはキリストの十字架のみわざのことでしょう。私たちはただ唯一の神である父なる神がおられるということだ

けで、神へと向かう今の歩みができるわけではないのです。このためにはキリストの十字架のみわざが必要です。そのキリストの十字架の愛のわざを通して私たちは永遠の昔から神に愛され、知られていたことを知り、また聖なる神を父なる神として知ることができ、またこの唯一の神へと至る歩みを可能な者にされています。このことを良く考えなければならないということです。次回見る 11 節でも、コリント人が見下していた兄弟のためにもキリストは死んでくださったと言われます。そのキリストの十字架の愛のみわざにより、その兄弟も、また自分たち自身も今日このように生かされています。このような神を仰ぎ、神に感謝するところから、私たちの生活が、特に「愛」という特性を発揮して導かれて行くべきである！というメッセージがここにあるということです。

以上、今日の箇所は今後の前提となるところで、少し難しく感じる箇所でしたが、パウロの言いたい基本メッセージは明らかであると思います。それは私たちもコリント人のように知識を誤って考え、これを誤って誇り、また誤って用いていることはないかということです。自分が持つ知識の正しさを主張し、それをもって他の人を論破し、見下し、分裂・分派を助長し、また相手を滅ぼすようなことをしていないか。しかしパウロは知識が人を育てるのではなく、愛が人を育てると言いました。これは有名な「愛の章」と呼ばれる後の 13 章につながって行くものです。パウロは 13 章 2 節で、たとえあらゆる「知識」に通じていても、「愛」がないなら無に等しいと言います。また「知識は人を高ぶらせる」と今日の箇所で言われた一方、13 章 4 節では「愛は高慢になりません」と愛はその逆であることが示されます。また知識はすたれる一方、「愛は決して絶えることがない」「いつまでも残る」と言われます。そして 14 章 1 節でこの「愛を追い求めなさい」と言われます。正しい知識は必要なものですが、それは愛と結ばれなければ人に益を与えるものとはならない。私たちはこれからの章を学ぶことを通して、この愛を追い求める者とされたいと思います。知識を求めることはもちろん良いことですが、それが愛において力を発揮することを追い求めたいと思います。その基礎は神様です。神がまず私たちを愛してくださいました。神がキリストを通して罪ある私たちを贖い、私たちを今日あるように神に向かって歩む者として育ててくださっています。私たちはこの神に感謝し、導かれて、神に倣う歩みへ進む者とされたいと思います。そして愛によって周りの人々が建て上げられるために仕える者とされ、そうして神に栄光を帰す歩みをささげる者へ導かれて行きたいと思います。